

(能)

# 橋弁慶

子方 渡邊さくら  
ツレ 谷 清士  
シテ 藪 克徳

大鼓 田中 一義  
小鼓 住駒 幸英  
笛 片岡憲太郎

問 山田 讓二

後見 松田 若子  
福岡 聡子

地謡  
浅谷 之信 松本 博  
水口 純治 高橋 右任  
船本 嘉人 島村 明宏  
大澤 永靖 山崎 健

休憩 二十分

(狂言)

# 棒縛り

太郎冠者 中尾 史生

主人 能村 祐丞  
次郎冠者 炭 光太郎

後見 清水 宗治

(仕舞)

# 卷

## 絹

キリ 広島 克栄

地謡  
佐野 弘宜  
藪 俊彦  
佐野 玄宜  
松本 博

(能)

# 當

## 麻

ツレ 高橋 憲正  
シテ 佐野 由於  
ワキ 平木 豊男  
ワキツレ 北島 公之

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 住駒 俊介  
太鼓 麦谷 暁夫  
笛 室石 和夫

問 炭 哲男

後見 渡邊荀之助  
佐野 弘宜

地謡  
山本 貢伸 佐野 玄宜  
岩井 嘉樹 大坪喜美雄  
中村 清 渡邊 茂人  
田屋 邦夫 川島 英治

終了 午後四時三十分頃

能 橋弁慶 (はしべんけい)

北野へ丑の時詣でに行く弁慶(シテ)を従者(ツレ)が引き留めて、五条の橋に曲者の出ることを教えます。従者が昨夜目撃したところでは、きゃつは十二三歳の小男ながら、小太刀を取れば蝶鳥のごとく、目にも留まらぬ神わざゆえに、さすがの弁慶でも討たれるのは必定というのです。そう聞いて断念しかけた弁慶は、聞き逃げを不本意として、曲者退治の覚悟を決め、夜の更けるのを待ちます(中入)。さて秋風吹く五条の橋では、明朝寺へ上る牛若(子方)が最後の相手を待ち受けています。そこへ橋板を荒らかに踏む音がして、大鎧・大長刀の弁慶が通り掛かります。薄衣で女装した牛若はすれ違いざま長刀を蹴上げ、月下に火花散る超人二人の決闘が始まります。身のこなしといい、太刀捌きといい、まこと神変奇特の牛若にはさしもの弁慶も討ち取る術がなく、ついには呆然と立ち尽くし、互いに名乗り合って主従の契約を交わし、九条の御所へ同道するのです。

狂言 棒縛り (ぼうしばり)

自分の留守中に使用人二人が酒を盗み飲むことに気づいた主人は、太郎冠者に棒術を使わせ、その棒に両手を、またそれを笑って手を後ろに回した次郎冠者をも、首尾よく縛って出掛けます。縛られた二人は不自由な手で酒蔵の戸を開け、酒壺の蓋をはずし、器に酒を汲み取って互いに相手に飲ませます。酔って気分がよくなった二人は、飲めや歌えの大酒盛りに興じますが、酒盃に映る主人の姿を執心と見て、からかいつのつて叱られます。

能 當 麻 (たえま)

二月十五日は彼岸の中日です。熊野参詣を終えた念仏の行者一行(ワキ・ワキツレ)が大和の国二上山麓にある当麻寺に到着すると、老若二人の女(前シテ・ツレ)が現れ法事に交じって一途に念仏を唱える様子です。行者の問いに応じて染殿の井や宝樹の桜を教えた女たちは、さらに詳しく当麻曼茶羅のいわれを物語ります。その昔、中将姫が生身の弥陀を観念して念仏三昧の定に入り、ついに老尼の姿をした弥陀の来迎を得たとのこと(五色に染めた蓮の糸で曼茶羅を織り上げたことはアイが語ります)。その時の老尼(化尼と化女)が行者の夢に現れたと言い二人は紫雲に乗って昇天します(中入)。重ねて奇特を拝もうとする行者の夢に、今度は歌舞の菩薩の姿をした中将姫の精魂(後シテ)が現れます。娑婆での信心ゆえに極楽の聖衆となった姫は、娑婆に却来して仏法の妙味を示し、経巻を開いて称讚浄土経への信心を勧めます。その舞い姿が行者に深い印象を残します。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年十二月二日(日)午後一時始

(能) 岩 船

(狂言) 不見不聞

(能) 通小町